

Title	ジャンヌ、遠き存在：『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想録』における啓示と意志
Sub Title	The unreachable girl : revelation and free will in Mark Twain's Personal recollections of Joan of Arc
Author	大串, 尚代(Ogushi, Hisayo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.79- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジャンヌ、遠き存在

『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想録』における啓示と意志

大串 尚代

1. はじめに

一八八三年に刊行された旅行記『ミシシッピの生活』(*Life on the Mississippi*)の中で、マーク・トウェインは南部が北部にくらべて時代遅れになってしまった原因は、ウォルター・スコットがもたらした中世趣味にあることを手厳しく批判している。

南部では健全でまともな19世紀文明とウォルター・スコットのまがいの中世文明 (the Walter Scott Middle-Age Sham) とが奇妙なぐあいに入りまじり、実用的な常識、進歩的な考えや仕事が、決闘だの大げさな弁舌だの、とうに死んでいて容赦なく埋葬されてしかるべきおろかしい過去のうんざりするロマンチズムだのと混在している。(第46章)

トウェインは、進歩とは逆行するような宗教観や階級意識、あるいは騎士道精神といったものを南部に植え付け害を及ぼしたのは、スコットがもたらした文学によるものだとして断じた。スコットへの不満は、同書の40章でも表れている。ルイジアナ州バトンルーージュにある州議事堂がネオゴシック建築になってしまったのも、スコットのロマンス作品の影響があったからだとして述べ、「城まがいの建物」とこき下ろしている。

近代化を阻むもの、思考を後退させるものとして中世趣味を見なしていたトウェインだが、彼自身『ミシシッピの生活』より前に中世を舞台にした作品を刊行している。それが『王子と乞食』(*The Prince and the Pauper* 1881)である。16世紀

中葉ヘンリー8世統治下のイングランドを舞台にしたこの作品は、皇太子であるエドワードと、貧民街で暮らすトム・キャンティの立場が交換されてしまうというあまりにも有名な物語だ。その顔立ちがあまりに似ているために、エドワード王子とトムがためしに身につけている服を交換したところ、トムが王子と間違われてしまい、エドワードは宮殿の外に追い出されてしまう。トムもエドワードも慣れない生活に戸惑いながらも、しだいに与えられた場に適応していく。

1889年には、軍需工場の現場監督であるハンク・モーガンが喧嘩の最中に頭を殴られ、6世紀のイングランドにタイムスリップをする『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(A *Connecticut Yankee in King Arthur's Court*、以下『コネティカット・ヤンキー』とする)をトウェインは刊行する。技術力のあるモーガンはアーサー王宮廷で魔法使いとおそれられ、大魔術師のマーリンと対決をしたり、自身の弟子を育てたり学校を設立して社会を近代化に導こうとする。

『王子と乞食』では取り替え子のモチーフによって、また『コネティカット・ヤンキー』においては時空間の超越によって、本来あるべきとされる秩序が転覆される。その秩序を代表するものが身分制度である。前者では出自によって決まる身分(王子か乞食か)の意味が問い直され、後者では地位や肩書きの高低によって人間に上下関係を強要すると説明されるローマカトリック教会の秩序がモーガンによってかきまわされる。いわば、場違いさを利用し、封建的な社会にアメリカの民主主義を導入するという妙味を、トウェインの歴史小説に見て取ることができる。

もうひとつ、『王子と乞食』と対になっている作品コンパニオン・ピース(Jenn and Morris 58)を忘れるわけにはいかない。それが1895年に雑誌『ハーパーズ・マガジン』に連載され、翌年単行本として刊行された『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想録』(*Personal Recollections of Joan of Arc*、以下『ジャンヌ・ダルク』とする)である。本作は、歴史上の人物であるジャンヌ・ダルクの伝記という体裁を取っており、さまざまな資料を踏まえて執筆されたことが単行本冒頭に付された参考文献リストからも見て取れる(n.p.)。しかし、メアリ・A・ナイトンが指摘するように、若い女性というトウェインの決して得意とは言えない人物をあえて主人公に据えたのは(76)なぜだったのか。なぜ歴史上の人物であるジャンヌを取り上げる必要があったのか。天使の声を聞き、その声に従って行動したジャンヌを描くことは、19世紀末のアメリカを生きるトウェインにとってどのような意味が

あったのか。本論では、中世後期を舞台にした『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想録』に描かれるジャンヌと彼女の意思のあり方に着目し、トウエインの人間観に関する考察を試みたい。

2. 19世紀アメリカと中世趣味

アリス・チャンドラーは、主にイギリスの中世主義について論じた『中世を夢みた人々』において、中世復興というムーヴメントは、イギリスをはじめとしたヨーロッパだけの現象ではなく、アメリカにまで及んでいることを指摘している(1)。その際、中世は秩序を持ち、調和に満ちあふれ、創造性にも富んでいた理想の社会として提示される。こうした中世の理想化が起こる背景には、社会や経済などの大きな変化にあるとチャンドラーは指摘する(3)。たとえば、それまでイギリスを支えていた伝統が失われていく時代にあって、中世は家父長制という安定した関係性を保ち、人々の繋がりが密であった時代として理想化されたという(4-5)。

翻って、19世紀アメリカでは中世主義はどのように受け入れられていたのだろうか。民主主義を謳うアメリカにとって、封建的社会であったヨーロッパ中世は受け入れがたかったのではないかという推測が可能かもしれないが、しかし中世の建築、文学、歴史は、19世紀アメリカ人の興味の対象であったことを、キム・モアランドは論じている。先述したとおり、トウエインは南部の中世趣味をけなしているが、モアランドによれば、中世への関心を示していたのは、南部貴族階級だけではなく、ニューイングランドの知識人たちも含まれていた(3)。特に建築に関しては、1830年代から40年代にかけて、アンドリュー・ジャクソン・ダウニングやアレキサンダー・J・デイヴィスといった著名な建築家がゴシック・リヴァイヴァル様式を流行させ、その人気は南北戦争後の1870年代まで続いたとされる(3)。

文学に関しては、フランス語、イタリア語、そして中英語からの翻訳が行われた。アーサー王物語をアメリカの一般読者に紹介したのは、トマス・ブルフィンチによる『中世騎士物語』(*The Age of Chivalry* 1858)である。本書の序文の中で、ブルフィンチは騎士道が近代には「法律の支配」に取って代わられたことを喜んでいるが、同時に騎士道がもたらす「無敵の力量、勇気、正義、謙譲、長上

に対する忠誠、同輩への礼節、弱者への憐憫、教会への献身」を備えた英雄像について触れている（第一章序説）。また、先述のモアランドは、ウィリアム・ギルモア・シムズが騎士の伝記を出版していること、シドニー・ラニエによる子ども向けのアーサー王伝説（*The Boy's King Arthur* 1880）などの存在を指摘している。さらにはヘンリー・ワズワース・ロングフェロー、ジェイムズ・ラッセル・ロウエル、チャールズ・エリオット・ノートンら、いわゆるボストン・ブラーマンと呼ばれる作家たちがダンテ協会を設立したのは1881年のことである。モアランドは、歴史や過去を持たぬアメリカが、中世という他国の歴史や文化を借りてくるのではなく、むしろ自分たちの文化として中世を再占有している点を指摘する。決別したはずの旧世界の歴史を自分たちのものとして思い返しつつ、中世は19世紀当時のアメリカの姿の比較対象となるだけではなく、未来への指標ともなっていたのである（Moreland 4-5）。

先のチャンドラーの議論を踏まえて考えるならば、特に南北戦争後の混乱した時代にあつて、安定と秩序と美徳を表す中世的世界へとアメリカの人々が目を向けたと考えることもできよう。科学やテクノロジーが発展していく19世紀後半にあつて、信仰のあり方や価値観が変化していく時期に、中世という時代が一種のノスタルジーの対象となっていくたのである。したがってトウェインが『王子と乞食』、『コネティカット・ヤンキー』、そして『ジャンヌ・ダルク』を執筆した時代は、中世的なるものがアメリカ文化の中で受け入れられており、建築などの目に見える形で存在していたのである。

しかしトウェインは中世や封建制度や宮廷などをノスタルジックに描くことはしていない。むしろカトリック教会に支配され、固定化された階級社会への批判にあふれていることは、一読すればあきらかであろう。ポール・L・キーゲルは、同時代に中世に関心を寄せたヘンリー・アダムズとトウェインを比較しながら、トウェインは中世を舞台に政治、忠誠心、そして正義と不正義にかかわる法の問題を描いたが（15）、彼の関心はつねに民主主義にあり、貴族が優遇され、平民（commoner）に法的正義がもたらされない中世を諷刺していると述べる（17）。その意味で、さきほどのチャンドラーが考察した多くの作家たちとは異なり、トウェインは中世社会へのノスタルジーを表しているわけではないようだ。

出自よりも何を成したかによって価値が測られる社会、勤勉に働く者が報われる社会をトウェインが求めていたことは、『コネティカット・ヤンキー』の次の

一節からもわかるだろう。とある貧しい人々の集団に出会ったモーガンは、彼らが「自由人」であることを聞き、次のように述べる。

つまり、(彼らは) 小規模な「独立して生活のできる」農夫や職人やなにかだった。ということは、とりもなおさず彼らこそ国民だったのだ。真の意味の「国民」だったのだ。彼らこそ役に立つもの、残しておく価値のあるもの、真に尊敬に価するもののほとんどだったのだ。そして彼らをのけものにするということは、国民を取り除くということであって、後には国王とか貴族とか紳士というかたちの澱と滓を残すだけということになるのだ。これらのものはぐうたらで、非生産的で、知っていることといえば主として浪費することと破壊することだけで、道理にかなうように作られた世界にあっては少しも役に立たず、価値のない輩なのだ。(第13章)

身分の高いものたちを「この金メッキの少数者 this gilded minority」と呼ぶトウエインは、中世を舞台にしてはいるものの、彼が生きていた19世紀後半の金メッキ時代の社会をそこに重ねている。ここでの中世は安定や美徳を表すのではなく、デモクラシーがまだ達成されていない未熟な社会であることが、ハンク・モーガンによって曝かれる。同時に19世紀のアメリカもまた批判の対象となる。

その意味で『ジャンヌ・ダルク』に登場するジャンヌは、トウエインの言うところの「真の意味の『国民』」として描かれていると言えよう。彼女はまさに「役に立つもの、残しておく価値のあるもの、真に尊敬に値するもの」に他ならない。天使・聖人の声に導かれて立ち上がり、戦いの先頭に立ちオルレアンを解放し、王太子であったシャルル7世を窮状から救い出したにもかかわらず、最終的には王に裏切られ処刑される。だが、『王子と乞食』や『コネティカット・ヤンキー』と異なり、歴史上の人物の伝記の体裁をとったこの作品には、反カトリック的態度、民主主義といったアメリカ的価値観の重視といった、明快な主張とは異なる、人間のあり方に対する迷いや揺らぎが見え隠れする。

3. 遠き存在のジャンヌ・ダルク

トウエインがジャンヌ・ダルクの存在を知ったのは、彼がまだハンニバルで印

刷工の見習いをしていたときだったことが、アルバート・ビゲロー・ベインによるトウェインの伝記に記されている。このあまりにも有名な逸話によれば、仕事場から家に帰る途中のサミュエル・ラングホーン・クレメンズ少年は、一葉の紙を見つけたという。それは本のページで、ルーアンの牢獄に捉えられたジャンヌが見張りのイギリス人兵士に女物の服を取り上げられ、男物の服を着なくてはならなかったという場面が記されていた（第16章）。ロナルド・ジェンとリンダ・A・モリスは、クレメンズ少年がこの頁を拾ったのは1849年のことであり、彼が手にしたのは1845年に英語訳が出たジュール・ミシュレの『ジャンヌ・ダルク』からの一頁であったと推察している（65）。ページは、このときクレメンズ少年に「ジャンヌ・ダルクの悲しい歴史に対する、このあとも消えることのない強い関心が芽生えた」と語る（第16章）。

このエピソードの真偽はともかくとして、トウェインは『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想録』を執筆するにあたり、12年に及ぶリサーチ期間と、2年の執筆期間を費やしたとされる（Jenn and Morris 64-65）。フランス語と英語の文献を読破し、長期にわたって準備したこの作品について、トウェインは執筆中の1893年1月18日に、友人であるメアリ・メイソン・フェアバンク스에宛てて以下のような手紙を送っている。「身内のために書いている本であって、出版するためではありません。愛ゆえに執筆していますが、お金のためではないのです。暖炉のそばのランプの周りで家族を楽しませるような本です」（Wecter 269）。トウェインにとって本書がかなり思い入れのあった作品であったことは、1895年に作品が完成し、雑誌『ハーバーズ・マガジン』での連載が始まった際、ユーモア作家として知られるトウェインの名が本作品の評価を損ねてしまうのではないかという懸念があり、あえて作者名を伏せての掲載となったことからもうかがわれる（Jenn and Morris 55-56）。

本作品はもちろん、フランスとイングランドが王位継承をめぐる争っていた百年戦争の最中である15世紀前半のフランスに突如あらわれ、イングランド勢に包囲されていたオルレアンを解放したジャンヌ・ダルク（1412?-31年）の伝記小説である。*Personal Recollections of Joan of Arc* というタイトルは、一見すると「ジャンヌ・ダルクの個人的な回想録」とも解釈でき、ジャンヌ・ダルク自身の個人的な回想録、つまり自伝のようであるが、実際はジャンヌダルクについての伝記の体裁を取っている。本作はジャンヌ・ダルク本人の回想ではなく、ジャン

ヌの幼なじみであり、のちに従者となったシユール・ルイ・ド・コント (Sieur Louis de Conte) なる人物が、ジャンヌの死後約60年たった1492年に、自分の甥や姪の子供たちの子供たちに向けて語った回想録を、さらにジャン・フランソワ・アルデン (Jean François Alden) なる訳者が翻訳したもの、という設定になっている。したがって読者は、ジャンヌ・ダルクについて語るルイ・ド・コントの言葉をアルデンが翻訳したものを読む、ということになり、読者とジャンヌ・ダルクとの間には遠い隔たりがある。

先述したとおり、トウェインとジャンヌ・ダルクとの出会いは19世紀半ばであったが、これはフランスでジャンヌ・ダルク関連の文書が刊行されたことと関係している。フランスでは1841年から49年にかけて、歴史家ジュール・キシュラによって、ジャンヌ・ダルクの処刑裁判記録を中心した全5巻の『ジャンヌ資料集』が刊行された (高山5)。また同時期の1841年にはジュール・ミシュレによる全5巻の『フランス史』の中に、ジャンヌ・ダルクに関する一章が組み込まれていた。この章が『ジャンヌ・ダルク』として独立し、英語に翻訳されたものが、トウェインが目にした1845年刊行の英語版であると推察される (Stone 3)。

そもそも、現在われわれが知ることができるジャンヌ・ダルク像は、この処刑裁判の資料によるとことが大きい。しかし、この資料の成立についてもまた、われわれとジャンヌとの距離の遠さを示している。高山一彦および中里まき子による説明をもとに整理すると、次のようにまとめることができる。ジャンヌ・ダルクの裁判資料は、1431年の裁判時にその場で取られたメモを清書した「フランス語原本」が最初に作成された。だがこれは1455年の復権裁判の折に検事に提出されてから所在不明となってしまったとされる。しかし、1435年の段階でこの「フランス語原本」をラテン語に翻訳した「ラテン語記録」が裁判所によって作成されていた。その写本5部のうち、現存するのは3部である。「ラテン語記録」をさらに写したものが「ラテン語写本」となり、それをフランス語に訳し返したものが「フランス語古訳写本」とされる。キシュラはこのような資料やその断片を精査し、記録を編纂した。われわれが知ることができるジャンヌは幾重にも翻訳され、断片化されたものをつなぎ合わせた存在であるといえる。

確実に実在した人物でありながら、またさまざまな資料や断片がありながらも——いや、だからこそ——ジャンヌ・ダルクという存在に近づくことができない。この遠さと不確かさは、トウェインの『ジャンヌ・ダルク』にも表れている

ように思われる。

4. 我欲なきジャンヌ

トウェインはこのジャンヌ・ダルクのどこに惹かれたのか。アルバート・ストーンは王室と教会という平民を苦しめる二大制度に立ち向かった人物というだけでなく、若さと純粹さを体現する人物であったと論じている。しかも彼女の特異性は、無垢である、というだけではなく行動する存在であったという点もストーンは指摘する(5)。ジェンとモリスは、トウェインがキシュラやミシュレの提示するジャンヌ・ダルク像、すなわちのちにカトリック教会が認める宗教的聖人像ではなく、愛国という価値観に支えられた世俗的な聖人というイメージを共有していたと論じている(64)。

たしかに、ドンレミ村の一少女ジャンヌが、たまたま出自が支配階級だからといってその地位に甘んじている人々をたじろがしていく姿は、デモクラティックな思想を体現する。だが同時に、トウェインの作品の中で、ジャンヌがあまりにも完璧な人間として描かれ、讚美の言葉が繰り返されることに、驚きを禁じ得ない。作品冒頭部、翻訳者であるアルデンが書いたという設定の序文では、ジャンヌはこのような美辞麗句で彩られる。

ジャンヌ・ダルクは常に欠点のない人物であり、常に理想的に完璧な人物である。(vii)

彼女は真実を語った。しかしその時代は虚言が人々の共通の言葉である時代だった。彼女は誠実だった。しかしその時代は、誠実がもはや失われた美德となっていた時代だった。彼女は約束の実行者だった。(中略)彼女は謙虚であり、上品であり、優雅であった。(中略)彼女は精神も肉体も一点の汚れもないほどに純粹だった。(vii-viii)

ジャンヌ・ダルクが生きた時代を腐敗や虚実にまみれた社会とみなし、ジャンヌがただ一人美德を備えた人物と評価する序文には、このような記述も見られる。

ジャンヌは、世俗的な歴史にその名をとどめる人物のなかで、恐らくただひとりの全くの我欲のない人物 (the only entirely unselfish person) だったと思う。自己本位 (self-seeking) などというものの痕跡や気配は何ひとつ、彼女のいかなる言葉にも、またいかなる行為にも、見いだすことはできない。

(viii)

ジャンヌ・ダルクのモデルとなったのは、トウエインの娘スージーであったということはよく指摘されていることだが (例えばKaplan xxxix)、トウエインが理想とする女性のロールモデル的な存在として執筆したということもありえるだろう。一方でクリスティーナ・ツヴァーグはミシュレ版のジャンヌ・ダルクがドラマチックな描かれ方をしていたため、そのパロディとして提示したという見解を示す (61)。本作品の語り手であるシユール・ルイ・ド・コント (頭文字はSLC、つまりトウエインのベルソナであることは容易に察しがつくだろう) は、ジャンヌ・ダルクという存在を、(幼い頃から知っていたにもかかわらず) 彼女の死後になってようやく理解したと語る——「いったいあのお方は何だったのだろうか——それは、この世をうけた人のなかで最も気高い人 (the most noble life) だったのだ、ただお一人の方を除いては」(2)。言い換えるなら、トウエインの『ジャンヌ・ダルク』においては、ジャンヌは同時代の人には理解しがたい存在として描かれていることが示唆される。その時、注目したいのは、ジャンヌの主体のあり方である。

さきに訳者アルデンは、ジャンヌを褒め称える際に、我欲がなく (unselfish)、自己本位 (self-seeking) ではない人物であると述べていた。もしこれがジャンヌの自己の欠如を示唆することであるというなら、どのような人物としてトウエインは——シユール・ルイ・ド・コントというベルソナを通じて——ジャンヌを描いているのだろうか。

5. 自己を持つジャンヌ、声を聞くジャンヌ

トウエインの『ジャンヌ・ダルク』では、ドンレミ村にいる頃からジャンヌが際だった存在であることを、語り手ド・コントが語っている。そこでジャンヌは正義感が強く、勇気を持ち、また他者への思いやりを忘れない。それはとき

に、自らの感情の発露を隠さなかったり、また自分が正しいと思ったことならば誰かからの許しを得る前に行動に移したりするジャンヌとして描かれる。たとえば、ドンレミ村には、妖精が住んでいると信じられていた「妖精の木」があった。そこに住まうとされる妖精を神父が追放してしまった際、ジャンヌは「恐ろしいほど激しい怒りに燃え上がって」(15) 神父のもとに乗り込んでいく。いったんは怒りをおさめるものの、神父の言い訳がましい説明を聞くと、ふたたびジャンヌの「怒りは燃え上がった。憤慨の涙が両眼にあふれた。激しい力と情熱とをこめてジャンヌは神父にむかって突進した」(19) ののである。

このジャンヌのひたむきさは、また別の場面では村にやって来た浮浪者に対して、まっさきに自分のポリッジの腕を差し出した場面からも見て取ることができる。父親からの「座っているんだ！」という指示を無視して、彼女は自身のすべきことをしようとする——「この人がゴロツキかどうかは知りません。でも飢えているのよ、お父さま、ですからわたしのポリッジをあげるの。——わたしはいりません」(24)。ジャンヌの我を通す姿は、村の子どもたちから狂人として怖れられているブノワという男性が斧を持って近づいて来たときにも表される。ジャンヌは斧を振り上げて脅すブノワに向かっていき、男と話し始めると、斧を取り上げて彼と一緒に村のほうへと歩いて行った(35)。この行為は語り手によって、「ジャンヌが自分のことや自分の危険のことなどまったく忘れ、ただほかの人たちの安全のことだけを考え」たものだと解説される(37)。しかし同時に、ジャンヌが自らの意思を貫いた行為でもある。神父や父親にも自分の意見を言うことができるジャンヌは、権威を持つ人物を前にしても自身の命が危うい場面でも怯むことはない。

しかし、作中では1428年5月に、ド・コントは森の中で「白い影」とジャンヌが交信しているところを目撃する。これ以降、ド・コントはジャンヌの行動や言葉の裏に天使や神の存在を見ることになる。ジャンヌが啓示を受けた後、ヴォークリュールの市長に会いにいき、フランスを救うために軍隊を用意してくれるよう要求する際、教育を受けたことのないジャンヌが地政学に精通しているのを見たド・コントは、「声 Voices」が彼女にそうしたことを教えたのだと自分を納得させる(77)。また、周囲の人々も、彼女の行動には「声」がついていると考える。ジャンヌの叔父のラクサールは、神がジャンヌに命令されたということは、以前だったら信じられないかもしれないが、「わたしはこの娘がこうした貴族や力

のある人たちの前に恐れる様子もなく立って、自分の言いたいことをちゃんとやっているのを見た。この娘がそんなことをするのも、神の助けによるほかにはできなかつたことだ」(69)と言う。

ここでは、神の力に後押しされるかたちでジャンヌ・ダルクがフランス救済に出向いたことを示すという意味で、ドンレミ村で見せたジャンヌの強い意思を持つ姿とは異なるものがある。だが、興味深いことにトウェインは、ジャンヌの意思と神や天使の声の関係を曖昧にもしている。たとえば、ジャンヌが地政学に通じているのを神の声のおかげと思っていたド・コントは、いま思い返すとジャンヌ自身が出会った人に熱心に質問をしており、「そういう人たちから、こうした多くの貴重な知識を一つ残らず根気よく見つけだしていたのだ」ということに気づく(77)。トウェインが描くジャンヌは、自らの意思で動く能動的な姿と、神の声によって動く受動的な姿が混在する。そしてその意思と声とのせめぎ合いがもっとも描かれていると思われるのは、作品の三分の一を占める、ジャンヌの処刑裁判のくだりである。

6. それは誰の行動だったか

トウェインの『ジャンヌ・ダルク』の第三部は、ジャンヌが捕虜となり、フランス側から身代金の支払いを受けることが出来ず、ルーアンにて裁判にかけられることになった様子が、ミシュレの伝記やキシュラの資料に即した形で語られている。裁判記録の中でジャンヌは、本当に神や天使の声を聞いたのかどうか、またジャンヌが男の服装をしているのはなぜなのかを繰り返し問われている。最終的にジャンヌは彼女を敵視する裁判長ピエール・コーションから12箇条の告発を突きつけられる。ジャンヌはいったんはその罪を認め、啓示は偽りであったとする「悔悛の誓い」に署名するものの(高山320)、その後再び男物の服を着用し、罪を認めたのは「火刑の恐怖から口にしたこと」に過ぎず、聖マルグリットと聖マルグリットの声はいまも聞こえていると述べたとされる(高山329)。

ミシュレはその著書の中で、ジャンヌ・ダルクは声を聞く存在であり、彼女の行動はその声に拠ったものであるがゆえに、その行動の責任は彼女にはないことをほのめかす。ミシュレは「<乙女>の特異性はその幻にあったのではない。中世において幻を見なかつた者なんて果していただろうか」(4)と述べ、ジャン

ヌが啓示を受けたことに疑問を呈してはいない。ミシュレは、敬虔なキリスト教徒であったジャンヌが牢獄の中で抱いたであろう気持ちを想像して、このように記している。

要するに、高位聖職者や神学博士に口答えするとは、彼女は何者だったのか。学問を身につけた大勢の熟達した連中の面前で彼女はどのようにして敢えて語ったのか。学識に対する無知な女の反抗、権威の座にのぼった人々に対するただの娘の反抗のなかに、傲慢や憎むべき高慢がなかったのだろうか……。そうした恐れは確かに彼女の心をおそった。

一方、そのような反抗はジャンヌのそれではなく、明らかに彼女にその返答を口授し、彼女をここまで支えてきた聖女たちや天使たちのものなのである……。(Michelet 95-96)

これはあくまでもミシュレがジャンヌの心中を想像しての記述であるが、ここで注目すべきは、ジャンヌの行動はいったい誰の行動だったのか、ということである。

ミシュレを読んでいたトウェインが描くジャンヌは、この点でかなりの揺らぎがある。ジャンヌが「悔悛の誓い」に署名した後に、着ないと誓ったはずの男物の服を着なくてはならない状況に追い込まれ、結果としてそれが彼女を処刑へと導くことになる。ミシュレも描いたこのエピソードは（その場面の頁をクレメンズ少年が手にしたということはすでに述べた）、トウェインも作品に取り入れている。「ジャンヌは誓いを破っていた。鎖につながれたままそこに座っていたが、着ているものは、以前のあの男物の服だった」(440-41)。その理由は、トウェインの『ジャンヌ・ダルク』では、次のように説明されている。すなわち、監視人の一人がジャンヌの女物の服を盗み出し、男物の服を置いたというのである。ジャンヌは結果、禁じられている男物の服を着るしかなかったのだ。トウェインの作品では、裁判長であったコーションが、ジャンヌを陥れるために部下に命じてジャンヌの女物の服を奪わせたことになっている。

ジャンヌは誰も非難しなかった。それがジャンヌの主義だった。あの方の性格として、こんなことは決してしなかった。つまり、主人の言いつけで召使いがしたことに對して、その召使いに責任をとらせる、などということは

な。(441)

この一節で明らかになるのは、誰かに命じられて別人が行った行為は、命じた者に責任があるとジャンヌが認識していた、ということである。この文脈では、監視人はコーションに命じられただけなのだから、責任はコーションにあることを示す。だがこれは同時に、神や天使、聖女の声に従ったジャンヌの行動の責任は、ジャンヌにはないことをも意味する。つまり、さきほどのミシュレの引用にあるとおり、責任はジャンヌにはないことになる。だが、この責任の所在を、トウェインはあえてはっきりとさせない。それは、裁判官から（男物の服を着ないという）誓いを破った理由を問われたジャンヌの答えを、ド・コントが聞き取れなかったという次の一節に見て取れる。

「なぜおまえは、またこの男の服装をしたのだ？」

わしは、ジャンヌの答えをはっきりとは聞き取ることができなかった。というのも、ちょうどそのとき、一人の兵隊の矛槍が手から滑って石の床のうえに落ち、ガシャリと大きな音をたてたからだ。しかしわしは、ジャンヌは自分の行為（of her own motion）でそうしたのだと言ったに違いない、と思った。(442 強調引用者)

なぜジャンヌの言葉は雑音にかき消されてしまったのか。ド・コントは自分の意志でやったのだ、というジャンヌの言葉を聞き取っていない。そう答えたはずだという推察はあくまでド・コントの希望的観測にすぎない。だが逆に言うならば、ジャンヌが自分の意思ではなかったと言った可能性も否定できない。この主体の曖昧性はなんなのだろうか。トウェインはいったいジャンヌ・ダルクをどのように捉え、どのように表象しようとしているのか。

7. 翻弄されつつ意志を持つこと

トウェインの『ジャンヌ・ダルク』では、ジャンヌは神からの啓示を聞くだけでなく、ときおりトランス状態に陥り、その間に言ったことを覚えていない、という場面が複数回挿入されている。ひとつはまだドンレミ村にいる時、将来誰

が戦争に行くかを子どもたちが話していると、ジャンヌが予言めいたことという場面 (44-45)、またオルレアンでの戦いが終われば、フランスにいるイングランド軍は千年立ち上がることが出来ないつつぶやく場面 (241)、そしていまひとつは、ジャンヌが異端放棄の誓文書 (悔悛の誓い) に署名をした場面である (433-34)。

「服従します」

彼らは、ジャンヌに考え直す時間を与えなかった。——その危険を知っていたからだ。その言葉がジャンヌの口から漏れた途端、マシューはジャンヌに異端放棄の誓文書を読みきかせていた。そしてジャンヌは、彼の後からその言葉を繰り返していた。機械的に、無意識に——しかも微笑みながらだ。なぜなら、ジャンヌのさまよう心は遙か遠く、どこかもっと幸福な世界にいたっていたからだ。(433-34)

ド・コントは、ジャンヌが異端を認めたのは、彼女がトランス状態だったからだと考える。つまり、誓文書に署名したのは彼女の意志ではなかったと、ここでは明快に解釈する。もしジャンヌに意識があれば、署名などしなかったのだと。それではなぜ、ド・コントは、男の服を着た理由を問われたジャンヌの答えが雑音でかき消されてしまったと語ったのだろうか。

ジャンヌのトランス状態はトウエインの創作だが、そうしたジャンヌ像を作り出したのはなぜだろうか。このことに着目したメアリー・A・ナイトンは、トウエインの三女ジーン (Jean) が患っていた癲癇との関連性をスリリングに論じている。トランス状態にあるジャンヌは、その行動は誰の行動かという主体や意思の問題を宙づりにする点で示唆に富む。ただ声に従って動くだけでなく、かといって自分の意思のみで動いているわけでもないジャンヌ。加えて、啓示による行動をするでもなく、自分の意識さえないトランス状態のジャンヌは、彼女の主体の位置が定まらない様子を前景化する。

ハロルド・ブッシュは、1902年にトウエインがジョナサン・エドワーズの『自由意思論』(*Freedom of the Will* 1754) を読んだ後、同書を貸してくれた友人のジョゼフ・H・トウィッチェルに手紙を送っていたことを記している。ブッシュによれば、トウエインは、人間の行為は自身の制御がきかない動機によって生じる

と述べているにもかかわらず、結果については人間が責められるべきと主張するエドワーズを、「狂人 a lunatic」と述べていたという (258)。トウェインはエドワーズを「まったくの宿命論者 a flat necessitarian」と呼んだが、友人のトウィッチェルは、エドワーズが論じようとしていたのは自発と必然を同時に備えた行為が可能であるということだと理解していた。しかしトウェインはそのことを理解できなかったのだとブッシュは考察する (260)。

自由意思に関しては、カルヴィニズムやピューリタニズムの文脈でも長らく議論されてきた問題であるが、チャールズ・ダーウィンの進化論がもたらしたインパクトにより、19世紀後半にも科学と宗教の問題とともに関心を集めていた。シャーウッド・カミングスは、金メッキ時代は、いわゆる啓示宗教と、理性や科学に関する理解が相互に対立するかたちで併存し、「二通りの知識」、すなわち「二通りの真理への道筋」があったことを述べている (6)。一方で、19世紀後半は信仰が力を失った時代と考えられることが多いものの、金メッキ時代は財政上でも教会員数でも教会が成長した時代であったことを、ポール・A・カーターは論じている (10)。このような時代背景にあって、神の声を聞いて行動した少女ジャンヌ・ダルクを描いたトウェインは、啓示と意思の間になんらかのバランスを見出そうとしていたのではなかったか。

12年にも及ぶリサーチの中で、トウェインはジャンヌの何を描こうとしたのか。SLCというイニシャルを冠したシユール・ルイ・ド・コントを語り手に据え、それをさらに翻訳したという体裁の原稿は、対象であるジャンヌをわれわれから引き離す。それはトウェイン自身の主体のあり方への戸惑いやゆらぎを示しているかのようだ。だが、ド・コントの語りの目的ははっきりとしている。それは、この小説の序文にあたる部分に次のような題名がついていることからわかる——「シユール・ルイ・ド・コントより 彼の甥や姪の子供の子供のまたその次の子供たちへ THE SIEUR LOUIS DE CONTE TO HIS GREAT-GREAT-GRAND NEPHEWS AND NIECES」(1)。この回想録が後の時代まで読まれてほしいというド・コントの希望は、すなわちトウェインが願っていたことでもあっただろう。ジャンヌが男物の服を着用したのは彼女の意思だったのかについてあえて曖昧なままにしながらも、ド・コントは「自分の行為でそうしたと言ったに違いない、と思った」と、ジャンヌの自由意思を信じている。まだ神の声が聞こえた時代である中世を舞台に、トウェインはジャンヌ・ダルクというひとりの少女が時

代に翻弄されつつ自分で決定する姿を描く。この人間の姿を未来の子供たちへ伝えることが、トウェインの願いでもあったのではないか。

8. 終わりに

ド・コントの「甥や姪の子供の子供のまたその次の子供たちへ」という願いは、現在でも国を超え、さまざまなジャンヌ・ダルク像が出ていることで成就されていると言えるかもしれない。中里は、ジャンヌ・ダルクを題材にした文学作品が増えてきたのはフランス革命以後と指摘し(69)、バーナード・ショーによる『聖女ジャンヌ』(*Saint Joan* 1923)、ジャン・アヌイの『ひばり』(*L'Alouette* 1952)、ベルトルド・プレヒトの『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年』(1952)を取り上げて論じている。また映画でも1928年の無声映画『裁かるるジャンヌ』(*La Passion de Jeanne d'Arc*)を始め、1948年のイングリッド・バーグマン主演の『ジャンヌ・ダーク』(*Joan of Arc*)があり、また1999年にはミラ・ジョヴォヴィッチ主演の『ジャンヌ・ダルク』が製作されている。日本でも、美内すずえの『白ゆりの騎士』(1974年)、また山岸涼子が『レベレーション』(2015-20年)でジャンヌ・ダルクをマンガの中で生き生きと描いた。

2022年、ジャンヌ・ダルクが小説の中で新たに甦った。キャサリン・J・チェンによる『ジャンヌ』(*Joan*)では、興味深いことに、神や天使からの啓示の場面がいったい排除され、自らの意志でのみ戦に向かうジャンヌが描かれる。活発で戦争ごっこにも参加するようなジャンヌは、家父長的でことさら自分を排除しようとする父親に反抗的な少女として描かれる。イングランド兵がドンレミ村に攻めてきたおりに、姉カトリーヌが兵士に暴行され、それがもとで自ら命を絶ってしまったことをきっかけに、ジャンヌの世界は一変する。ジャンヌは姉を陵辱したイングランド兵への憎しみと、この戦争を生んだ権威ある者たちへの憤怒を胸に、自分自身の努力によって力をつけ、戦いに身を投じる。「わたしはこの世で最強の戦士だ」(337)と言いながら、最後の戦いとなったコンピエーヌへと赴くジャンヌには、自らの意思以外のものに動かされているという迷いはない。

何度も翻訳が重ねられたジャンヌ・ダルクの資料は、彼女の直接の声からは遠く離れているかもしれない。だからこそ、ジャンヌ・ダルクはその時代ごとの思潮を身にまとうことが可能なであろう。マーク・トウェインが求めたのは、ス

コット流のロマンスでもなく、安定した社会として表されるノスタルジックな中世でもなかった。科学と宗教が拮抗する19世紀末に、トウエインが人間の行動と責任、自由意思と啓示との間にゆれるジャンヌ・ダルクを中世から甦らせたように、彼女はこれからも生き続けていく。

引用参考文献

引用は既訳があるものは既訳にしたがった。ただし文脈に応じて部分的に訳を修正したものもあることをお断りしておく。

Bulfinch, Thomas. *The Age of Chivalry*. 1858. The Project Gutenberg, 2004. Online. <https://www.gutenberg.org/cache/epub/4926/pg4926.html> 『中世騎士物語』野上弥生子訳 岩波書店、1942年。

Bush, Harold. *Mark Twain and the Spiritual Crisis of His Age*. U of Alabama P, 2007.

Carter, Paul A. *The Spiritual Crisis of the Gilded Age*. Northern Illinois UP, 1971.

Chandler, Alice A. *Dream of Order: The Medieval Ideal in Nineteenth-Century English Literature*. U of Nebraska P, 1970. 『中世を夢みた人々——イギリス中世主義の系譜』高宮利行監訳 研究社、1994年。

Chen, Katherine J. *Joan*. Hodder and Stoughton, 2022.

Cummings, Sherwood. *Mark Twain and Science: Adventure of a Mind*. Louisiana State UP, 1988.

Jenn, Ronald, and Linda A. Morris. "The Sources of Mark Twain's *Personal Recollections of Joan of Arc*." *Mark Twain Journal*, vol. 55, no. 1/2, 2017, pp. 55-74.

Kaplan, Justin. Introduction. Twain, *Personal Recollection of Joan of Arc*, pp. xxxiii-xlii.

Kegel, Paul L. "Henry Adams and Mark Twain: Two Views of Medievalism." *Mark Twain Journal*, vol. 15, no. 3, 1970, pp. 11-21.

Knighton, Mary A. "Hearing Secret Voices in Twain's *Personal Recollections of Joan of Arc*." *Mark Twain Journal*, vol. 55, no. 1/2, 2017, pp. 75-99.

Michelet, Jules. *Joan of Arc*. 1957. Translated by Albért Guerard, U of Michigan P, 1967. 『ジャンヌ・ダルク』森井真・田代葆訳 中央公論新社、1987年。

Moreland, Kim. *The Medievalist Impulse in American Literature: Twain, Adams, Fitzgerald, and Hemingway*. U of Virginia P, 1996.

Paine, Albert Bigelow. *Mark Twain: A Biography*. 1912. The Project Gutenberg, 2006. Online. <https://www.gutenberg.org/files/2988/2988-h/2988-h.htm>

Stone, Albert E., Jr. "Mark Twain's Joan of Arc: The Child as Goddess." *American Literature*, vol. 31, no. 1, 1959, pp. 1-20.

- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. Charles L. Webster and Company, 1889. The Project Gutenberg, 2004. Online. <https://www.gutenberg.org/cache/epub/86/pg86-images.html> 『アーサー王宮廷のヤンキー』 大久保博訳 KADOKAWA、2009年。電子版2014年。
- . *Life on the Mississippi*. James Osgood and Company, 1883. The Project Gutenberg, 2004. Online. <https://www.gutenberg.org/cache/epub/245/pg245-images.html> 『ミシシッピの生活』 上・下巻 吉田映子訳 彩流社、1995年。電子版2014年。
- . *Personal Recollections of Joan of Arc*. Edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996. 『マーク・トウェインのジャンヌ・ダルク』 大久保博訳 KADOKAWA、1996年。電子版2015年。
- . *Prince and Pauper*. 1881. James Osgood and Company, 1882. The Project Gutenberg, 2004. <https://www.gutenberg.org/cache/epub/1837/pg1837-images.html>
- Wecter, Dixon, ed. *Mark Twain to Mrs. Fairbanks*. Huntington Library, 1949.
- Zwarg, Christina. "Woman as Force in Twain's 'Joan of Arc': The Unwordable Fascination." *Criticism*, vol. 27. No. 1, 1985, pp. 57-72.
- 高山一彦編訳 『ジャンヌ・ダルク処刑裁判』 白水社、2002年。
- 中里まき子 「ジャンヌ・ダルクの処刑裁判と文学作品——少女の『裏切られた遺言』」 『岩手大学人文社会科学部紀要 アルテス リベラレス』 第85号、2009年、69-88頁。
- ブラム、デボラ 『幽霊を捕まえようとした科学者たち』 鈴木恵訳 文藝春秋、2007年。